

## イエス様の贖いと信者の願い (マルコ 10:32-45)

私たちは神様の恵みにより救われて神様とともに歩む信者、クリスチャンになりました。にも関わらず、未だにその人の願いが以前のまま何も変わっていないと、素晴らしい人生、神様の答えの中を歩く人生が備えられているのに、それをなかなか見ることができないまま同床異夢の状態になります。後で調べてみてください。

今日の聖書を見ますと、イエス様が改めて弟子たちに、イエス様が十字架で死なれて三日目に復活なさることをおっしゃいます。3 回目です。それを聞いていた弟子の中のヤコブとヨハネという兄弟二人が、「イエス様。イエス様が王様になったときに、栄光を受けられたその時に、ひとりには右に、ひとりには左にお願いします」と懇願する場面が紹介されています。そこでイエス様は、あなたがたは今、自分が何を言っているのかよく分かっていないのだというお話をしているときに、残りの十人の弟子たちがその光景を見て腹を立てて怒って「あの二人、あの野郎。ずるいな。自分たちだけで。私たちはどうなるの」という意味で怒ったわけです。そこでイエス様は、たぶんあなたがたは異邦人の権力者のことを見て憧れてそれを求めているようだが、イエスに従うクリスチャン、信者は真逆なんだよ。偉くなりたい人は仕える者になり、またしもべにならないといけないというお話をされたその箇所です。つまり、イエス様から見ると、ひとりには右、ひとりには左とお願いしていた者、またそれを見て怒っていた残りの弟子たち、みな一緒なのです。彼らの様子を見てイエス様はある意味、心を痛めて、信者、クリスチャンというのは一体どんな存在なのか、何のために生きるのか、そして、どのように生きればよいのかという話をされたわけです。

なぜ弟子たちは願いが変わってないまま、イエス様が十字架のお話をしているのに肉体的に右、左にこだわっていたのでしょうか。いつになったら弟子たちの願いが変わるのでしょうか。そういうことを今日の聖書を中心にして考えていきたいと思います。

### 1. キリストの贖いの死を知り感謝すると、信者の願いは変わる。

まず第一に、キリストの贖いの死が何か正しく知り、それを感謝するとき、信者の願いは変わります。

#### 1) 贖い(救い)を否定することだらけのこの世

-哲学、宗教、思想、教育、映画、音楽、美術、小説、漫画、アニメ-すべての根幹はヒューマニズム  
いま私たちが生きるこの世というところは、キリストの贖い、つまり救いを否定することだらけのところなんです。私たちはその中をいま生きています。哲学というものは、時代によってころころ変わったり、また人によってその色が変わります。しかし、その哲学は時代がどう変わろうが、誰が何を言おうが、その根底の方には結局、あなたの責任はあなたにあるよという話なのです。それから、宗教もいろいろな宗教、いろいろな教えがあります。しかし、宗教の一番、根幹の方には、結局、人間、自分を磨くということにポイントがあるものなのです。そして、世の中には様々な思想やいろいろなイデオロギーなどがあります。そういう内容も、結局は人間が何をどうするかによって変わるんだという訴えなのです。また、学校の教育などに力を入れています。教育は必要なものです。しかし、その教育の根幹にも何があるかと言いますと、結局、あなたがどれほど知識を積むかによってあなたの人生は変わるものなんだよ。人間が何をどうするかによってそうなるものですよということなのです。つまり、すべての世の中の流れの根幹の方には、ヒューマニズムというものがしっかりと根を下しているものなのです。それはすべて裏返しますと、キリストの贖い、救いなどはいらない、直接それを語っているかそうでないかと関係なく、全部がそういうメッセージなのです。

それが形になって文化として現れ作品になって人々の心に染み込むようになります。映画や音楽、美術、小説、漫画、アニメ等々、すべてが結局、このようなヒューマニズムの思想をあらゆる角度から訴える作品なのです。そのような世の中で私たちはいま生きています。だから、そこで訴えている内容は、全部がこれなのです。あなたの人生は結局、あなた自身が決めるものなんだよ。あなたが主人なんだから。なので、もし万が一、過ちを犯した場合でも、反省して新しく始めれば結構なんだよと訴えます。これがヒューマニズムです。諦めなければ必ず道は開かれますよと。努力は必ず報われますよ。あなたの今の姿、ありのままでもいいんじゃないのと訴えるわけです。とてもとても美しい言葉、とても格

好良く聞こえるかもしれませんが。なので他のことを考えず、救いがどうのこうのに耳を貸さず、瞑想に励みなさいよ。修行や苦行などを通して自分を磨くべきなんだよと。それももうまくいかない場合は、

「最終的に、なるほど、贖いでないといけない、救いが必要なんだというところに行くべきなのに」最後の最後までそれを拒否します。それでももう終わりにしようということで、自分で自分の命を絶つように誘います。それも結局は救いはいらぬという裏返しなのです。。世の中、全部がそういう内容に構成されています。あるいは、次の世界に行こうではないかということで、今のすべてを諦めようと誘います。それが悪いことなのか、良いことなのかという道徳的なお話の前に、救いの必要を全面的に真っ正面から拒否する、そういう話ばかりなのです。

歌の歌詞を通して「ああ、とても苦しかったけれども助かった」という話がいっぱいあります。そうかもしれませんが助かってどうなりますか。それが本当に助かったことでしょうか。それは本当の感動なのでしょう。結局、言わないけれどもそれを裏返しますと、救いはいらぬ。キリストの贖いなどには目を止めてはいけませんよ。そこにこだわってはいけませんよ。耳を貸してはいけませんよ。そういう訴えなのです。宗教の教えも思想とイデオロギーも哲学の話も全部がそうです。昔の哲学者でも、今の哲学者でもその話の内容が異なっているかのように見えるかもしれませんが、根幹の方はヒューマンイズムなのです。ヒューマンイズムは何でしょうか。自分の人生は自分で決めるものだから救いなどはいらぬ。全部がそういう話です。そういう中で神様の恵みによってキリストの贖いの救いに預かった者をクリスチャン、信者と言います。

## 2) キリストの贖いの他に希望がないと認めるところから

-救い-歴史のテーマ、存在の理由、人生の願い

なので、クリスチャンの信者の願いが変わるということは、このキリストの贖いの救いの他には希望がないということを中心から認めるところから始まります。なぜクリスチャンになって教会にも通っているにもかかわらず、願いがなかなかそのまま、変わっていないのかと言いますと、キリストの贖いの前に真剣な思いで立った経験がないからではないでしょうか。キリストの贖いの他には希望がありません。それでキリストの贖い、キリストの十字架の贖いの前に立って、このように思われることが恵みなのです。罪のない神の御子キリストがここまでして罪人を救おうとしていらっしゃるのか。救いとは一体何なのか。どれほど価値あるものなのか。旧約を見ますと、ノアの時代に洪水によってその時代の全人類を滅ぼしてノアの家族を助けます。そうしてまで私たちを救おうとしていらっしゃいました。救いとは一体何なのか。何に比べることができるのかというふうに思い、そういう悟りが与えられて、そのように思われることが恵みなのです。キリストの贖いの十字架の前に立つというのはそういう意味なのです。イエス様がキリストの十字架の贖いを語っているにも関わらず、全く聞く耳を持っていなかった弟子たちのようにならないで、そのキリストの贖いの十字架の福音のメッセージの前に自分を持ち出して、それを聞く耳を持たないといけません。救い

は一体何なのか、どれほど価値あるものなのか、それに気付いたときに、なるほど、歴史はこの救いのためなにあるものだね。歴史のテーマが救いだということがわかります。そして、人間が存在する理由は、救われるためなんだね。救われるために日本人として生まれて、自分はあまり好きではない環境で生まれて育っているかもしれません。自分が望んでいないのに様々なショッキングな出来事と遭遇して人生を歩いてきたかもしれません。なぜなのでしょう。救われるためです。救いは絶対価値であり、救いは絶対なのです。何ものにも比べることができないのです。なぜそう言えるのでしょうか。神様ご自身がこの救いのために、ご自分のいのちを身代わりとして捧げました。差し出しました。そこまでして人を救おうとしていらっしゃったわけです。イエス様は今そういうお話をしている場面なのです。だから当然、神の恵みによって救われたクリスチャン、信者の私たちの残りの生涯の人生の願いは、この救いになるはずなのです。でもそうならないというのは、弟子たちのように救われたにもかかわらず、キリストが罪人の身代わりとして救いのためにご自分を犠牲にされる贖いの救いの祝福に対しての感謝が全くないからです。ある意味、その意味もよく分かっていないかもしれません。たまたまだれかによって教会に連れて来られて「まあいいな。少し慰めになるな」という感じのままかもしれません。そこから抜け出さないといけません。

## 3) 贖いの感謝がないと願いは以前のまま、葛藤と争いも以前のまま(3, 6, 11の欲)

贖いの感謝がないと、クリスチャンであるにも関わらず、願いは以前のままなのです。ヤコブとヨハネ

のように。それから、葛藤と争いも以前のままです。残りの弟子たちのように。つまり、神様を離れたときに自分中心、肉が中心であり、この世が中心であり、それに対して欲と欲望を持っていて、それが本当は願いだったわけです。それで自分がとにかく上手くいくこと、肉的に豊かになって裕福になること、この世的に成功を収めることに対しての欲、欲望などがあります。誰もが欲、欲望という言葉は使いたくありません。しかし、それが願いなのです。どんなに美しい言葉で着飾っても欲、欲望なのです。それに対して聖書はこのように警告を発しています。ヤコブ 1:15「欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます」。I テモテ 6:10、「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人たちは、金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました」。金銭を愛するというのは欲なのです。それが願いなのです。願いという言葉を使って、欲という言葉を使わないのですが、聖書はこのように断言しています。I ヨハネ 2:16-17「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもながらえま」と聖書は明確に言っているわけです。キリストの贖いの救いが何かよくわかっていない。それに対しての感謝、感動がないと仕方がなく、どんなに良い言葉で飾って、どんなに熱心なふりをしていても願いはそのままなのです。誰が一番よくわかってるのか。神がご存じあり悪魔、悪霊が一番よくわかってるので、霊的に成長もないし、本当の癒しもなかなか経験できないし、今日の弟子たちのようにそういう場面に遭遇することばかりになってしまいます。しかし、クリスチャンはキリストの贖いの死の意味を正しく知り、それを感謝することで信者の願いは「魂の救い」に変わることとなります。

## 2. 魂の救いが願いになると、生きる姿勢が変わる。

そして、二番目、この魂の救いが自分の願いになった場合に、その人の生きる姿勢が変わります。イエス様はそのことを今日の聖書の中で、わたしが来たのは仕えられるためではなくて、仕えるために来た。多くの人のために、ご自分のいのちを犠牲のいけにえとして捧げるために来た。それが仕えることなんだとおっしゃいました。

### 1) ピリピ 2:5-7

それからピリピ 2:5-7 を見ても、「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ」と書いてあります。これがイエス・キリストの心構えです。ほかの人を自分より優れたものとして見なさいと言われていました。そういう姿勢になります。救いが本当の願いになった場合に仕えることというのは、ただ姿勢を低くして声を小さくするというものではありません。イエス・キリストがそのサンプルなのです。

### 2) 人の救いと救いを味わうことを第一にして

なので、人の救いを第一にして、また救われた人は、その人が救いの祝福を正しく知り味わうようになり、ほかの人にまた救いの祝福を伝えること、それが第一の目標なのです。

### 3) 自分を無にして、聖霊の導きに

ぶれることなくそれを軸にして、その後、だからこそそこから生まれるのがイエス様がなさったように、自分を無にしてです。なかなか難しいでしょう。だから祈るべきなのです。自分を無にしてというのは宗教的な話ではありません。ほかの人を自分より優れた者として見るというのは、その人が救われるべき魂なんだという見方です。あるいはこの人がほかの人の救いのために用いられる伝道者として召されている。ただ、今現在はそういうことがなかなかそのように映らないのです。でも、神様がそういうふうに見ていらっしゃるから、それに従いそういう目で見、それを第一にして自分が思っていること、自分のレベル、自分の感情、自分の考え方などを無にする、理屈や利害関係の損得など、ときには何かのルールや法則なども全部超越してということなのです。そういうことに引っかけからず自分を無にする。それが信者の生きる姿勢になります。そうすると聖霊の導きに預かるようになります。その人のために一番最初祈るようになるでしょう。その人が救われることは、人間の甘い言葉や何かのプログ

ラムでできることはありません。神様の恵み、御座の力によってキリストの贖い、栄光の光がその人に照らされること以外にはないのでお祈りを捧げます。その人のために。そして、神様が許されれば、機会が許されたときには、正しくイエスの福音ををおあかししていくようになります。しかし、それがすぐに思いのままにうまくいくわけではありません。神様の時刻表というものがありますので、仕える者はそこで自分を無にして落胆することも高慢になることもなく、譲って忍耐をもって待つことになるでしょう。これが自分を無にするということなのです。ときには、その目標のために犠牲を払わないといけない場合には喜んで犠牲を払うこととなります。それが自分を無にするということです。時間を犠牲にして経済を犠牲にして体力を犠牲にして、時にはその救いの目標のために迫害を受けないといけない場合は、迫害を喜んで受けます。苦難に預かるようにならざるを得ない場合は、苦難を選んで苦難に耐えていくこととなります。これが自分を無にするということなのです。これが仕える者の姿勢です。なぜなのでしょう。聖人君子だからではありません。心が広い人間だからではなくて、イエス・キリストの心構え、イエスのいのちをもって目標が救いに定まって、ほかの目標、ほかの願いを捨てて、これだけを願いに絞ったものなので、自分を無にするということとなります。私たちの力でできないでしょう。これは人格によるものではありません。だから祈るわけです。でも答えをしっかりとぎって行かないといけません。教会に皆さんが見たときに変な人間、どうしても受け付けることができない人間が来るかもしれません。そこが教会なのです。でも、皆さんがどういう姿勢を示すかによって、その人がちゃんとここにいるか、離れるかなどになるわけです。私たちには人をさばいたり批判する資格などは一点たりとも持ち合わせていません。私のような人間を地獄から救い出ただけではなくて、救われた後もところどころ変わるこんな変な人間を諦めることなく、捨てることなく、今まで主が守って忍耐をもって愛していらっしゃるのではないのでしょうか。

#### 4) 仕える人

そういうことを覚えつつ、エペソ 3:1 にはこう書いてあります。「こういうわけで、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となった私パウロ」。パウロは異邦人の救いのために囚人となることを喜んで甘んじて受け入れます。それが仕えるという意味です。ただびびって姿勢を低くするとかそういう意味ではありません。ピリピ 1:23-24 「私は、その二つのもの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です」。私はイエス様と一緒にいることがずっと願いなんだ。ただ一つ、教会のために、相手のために。これが大変なことなのですが、必要なことであればそれ喜んで受け入れます。仕えるものの姿勢、聖霊の導きに従う生きる姿勢を示しています。ヨハネ 13:34、イエス様が最後に残された戒めです。「あなたがたに新しい戒めを与えましょう」。互いに愛し合いなさい。これ以外に戒めは残したことがありません。戒めはなんのでしょうか。これだけなのです。これが旧約の聖書 66 巻の戒めをギュッと絞りだして、そこから生まれたエキスなのです。仕える者になりなさい。世の中にはほかのなにかではなくて救いが必要なのです。それがあなたがたの願いでなければいけません。でもなぜそれが願いでないのでしょうか。祈りが変わらないう。つまり理由が変わらない。全部が願いがいまだに変わっていないのです。この願いが変わっている者は、一見、危機のように、葛藤のように、問題のように見えることの裏側を見るようになります。これが仕える者の力であり、生きる姿勢になります。イエス様はこのような生き方のことを仕える人とおっしゃいました。弟子たちが今、自分の変わっていない願いをイエス様にぶつけて、王様になれば、右、左、またそれを見て怒っている人、みな同じレベルの人なのです。それに対してイエス様がおっしゃいました。今、イエス様が仕える者として、ご自分のいのちを罪人のために身代わりとして自分を犠牲にして十字架で死ぬというお話をしていらっしゃるのに、彼らはこういう反応をしているわけです。もしかしたらこれが私たちの姿ではないのでしょうか。講壇から神様は皆さんひとりひとりに語りかけていらっしゃるのに、皆さんの願いが渦巻いていて、それが聞こえてこない。いつも自分の願いばかりぶつけて。それで次の礼拝のときにまたイエス様が神様が仕える者になりなさい。願いを変えなさいとずっと語るしかないのです。なんで笑ってなんで泣いてなんで喜んでなんでつまずいてらっしゃるのでしょうか。よく吟味しなければなりません。大きな何かを要求していらっしゃるわけではありません。それは宗教であって、福音ではありません。皆さんの能力も環境も条件も才能も神様には関係ありません。キリストの贖いの前で感謝して感動してそこにのめり込んで、今までの自分を否定して覚悟を決めてください。なるほど、無駄な間違っていた人生を送ってきたんだね。クリスチャンでありながら

も道はずれだったんだね。願いが変わっていません。何がそんなに不安なのでしょう。その通りにならないとダメなのでしょう。願いを変えること、それだけが神様の願いなのです。その願いが変わって、それをぎゅっと握ることを契約を握るというふうに聖書は私たちの語っていらっしやいます。イエス様の贖いの死の前にしっかり立って、救いの絶対必要と絶対価値に目覚めましょう。それで、その救いを中心に皆さんの人生を整理する、そういう静かな時を持ちましょう。真剣な時を持ちましょう。それを編集と言います。ただ言われたので、宿題みたいにやるのではなくて。皆さんが今まで心の傷になるしかなかった過去の出来事、皆さんが嫌だとトラウマになっていたすべてに対して、救いを中心に再整備しないとはいけません。今現在もこれからの皆さんの残りの生涯も。それで自分の願いは一体何なのかということ吟味して素直に点検する時を持ちましょう。特にレムナントの場合は、この願いがちゃんと吟味されて、神様の願い、クリスチャンの願い、人の魂の救いが本当に願いとしてしっかり植え付けられた場合には、レムナントは成功します。何も心配しなくていいです。レムナントはその願いをもってこの質問だけぶつけばよいです。これだけ祈ればいいです。「どうか神様、この願いのために私はどこで何をすれば、どこで何をしてこの願いに用いられることができるのでしょうか」と祈るレムナントになること。その祈りのところまでレムナントが導かれるべきなのになかなか難しいのです。祈るべきです。そして、みながイエス様の心構えを持って仕える姿勢を決意しましょう。自分よりほかの人を優れた者に見ていこう。あんな人間が私より優れた？と思われるようなことがたくさんあるでしょう。もちろん人間はみなどこかで自分が偉いと思っているのです。それは全部勘違いです。他人を自分より優れた者とする。これは卑屈になるという意味ではなくて、神様がそういうふうに見ていらっしやるからです。救いが必要な魂、神様はキリストの贖いの救いを与えようとしていらっしやる、愛してらっしやる。また、この人の救いのために用いられるために召されている尊い伝道者、そういう目で信者を見る。レムナントを見るということです。今現在その人がどういう状態なのかは、そこを中心にして時刻表を計算していかないといけません。それを覚悟しましょう。それが一つの戒め、互いに愛しなさいとおっしゃいましたそういう内容です。しかし、先ほど申し上げましたように、ここまでわかっているにも関わらず、私たちにはこれができないように、これに抵抗する古い人間が私の内側にあります。それを素直に認めて、だから祈るわけです。このことのために使徒1:8を握って、それはあなたがたは知らなくてもいいです。Only 聖霊が臨まれるとこうなるんだよと信じて。いや、私のような人間はいままでの人生を振り返って一度も仕えとかは無縁な人間でした。今更と思うかもしれません。それが不信仰です。キリストの贖いの前に立って。それを感謝しましょう。願いを人の魂の救いに絞って、ならば仕える者にならなければ。仕える者が現場においても征服者になります。偉そうにするものは征服者になりません。柔和な者はこの地を相続すると言われているのではないのでしょうか。そういう意味です。なのでそれを決心しましょう。自分を無にすることを決心しましょう。自分の意見、感情、主張。プライド等々は全く役に立たないもの、全くいらぬものなのです。でも実際には難しいのです。いつそれが可能になるのか。そのためにクリスチャンには聖霊が注がれること、上からの祝福をその力が与えられることが約束されています。だから祈るわけです。その約束を握って14節の祈りに入ります。だから祈るわけです。問題があるから、これをどうにかということ祈るのではなくて、このために私には聖霊が臨まれまして、御座の祝福がないと、自分のまま自分のレベルのまま動くしかない存在なので、どうか精霊を豊に注いでください。絶対必要です。祈り。理屈を全部振り払って祈りましょう。それで自分はキリストはあがないに感謝して感動して、その願いを常に前面に立てて、仕える者として素敵な立派な征服者の人生を歩くことを主の御名によって祝福をいたします。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。

キリストの恵みにより。救われて礼拝を捧げる神の子どもになりました。心から感謝します。しかし、願いが変わっていないまま暗闇の勢力に騙されることがたくさんあります。どうかこれ以上騙されることなく、その前に立って本当に救いの絶対価値に目覚めて、救いを自分の人生の願いにして、そのためにキリストの心構えを持って、自分を無にして人に仕える信者になるように、それでいのちの実を結ぶことができるようひとりひとりを祝福してください。私たちの力ではできません。だから約束を握って信じて祈ることによって、証人として立たされるようにひとりひとりを導いてください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン